「ロックンロール神話考Ⅱ～末法篇」　2024年5月28日草稿

原作・脚本：鎌田東二

演出・芸術監督：レオニード・アニシモフ

制作・主演：劇団ノーヴィ

上演：2024年12月

出演者

おのごろ村の住民3人

1. 良夫（よしお）
2. 悪売（あくめ・女性）
3. 流太（りゅうた）

狂言回り＝天気予報官：天気見太郎（てんき・みたろう）

イザナギ

イザナミ

少年少女探偵団員

1. ルリア（少女）
2. ジョバンニ（少年）
3. 都留女（とどめ、少女）
4. 鯉太郎（こいたろう、少年）
5. Qeer・クイア（性同一性障害の少年・少女？　異星人？　宇宙人？）

異界人

1. ニーチェ
2. 空海
3. 番場の忠太郎
4. デロリンマン
5. シモーヌ・ヴェイユ
6. ヤマトタケル
7. 宮沢賢治
8. おつる（阿波人形浄瑠璃「傾城阿波鳴門」）
9. マッチ売りの少女こと実はモッキリ屋の少女コバヤシチヨジ

序幕

**日本列島のどこかにある「おのごろ村」**

**悪売**「商売、あがったりだよ～。こんな、お天気じゃよう。作物も、売る物も、盗る物もなんにもねえ。干上がっちゃったよ～、もう。どうなってんだ、この世はよう。もうお手上げかい？」

良夫「アクメよ、そんなときだかこそ、おらたち、いっしょけんめい、おてんとさんのしたで、がんばるんだよ。笑う門には福来たるだよ。わはははは。わはははは。ワー、ハッ、ハッ、ハッ！　がんばんべ～！」

**流太**「とはいえのう、ヨシオよ。おらたち、もうなにをしてもダメなんじゃねえのか？　なにをしても、なにもできねえよ。アクメが言う通り、おれたち、干上がっちゃったのさ。

むかしむかしあるところに、不思議な樹と巌（いわ）と泉があって、それぞれ、実に立派な威厳をもって、互い自慢をしてだんだって、さ。

俺は、世界一高い樹だぞ、僕は世界一大きな堅い巌だよ、わらわは世界一きれいでおいしい水の湧く泉よ、と、ね。

だがそれも、いつしか、樹は斬られて家や机や椅子になり、巌は割られていろんな道具にされてしまい、泉は組み尽くされて、もう水一滴も残されていない、だよ。

そんな世の中になってよう。この世は「末世だ、末法だ！」と叫ぶ荒法師たちが跳梁跋扈するようになってさ。もうみんな、世も末じゃ、親が子を殺し、子が親を殺し、あらゆるものが殺しあう、手のつけられねえ世の中になっちゃったのさ。」

**悪売**「リュウタの言う通りさ。もう、どうにも、こうにも、手がつけられないのさ。」

良夫・悪売・流太「かみさま、ほとけさま、ごせんぞさま、まんまんちゃん、なんとかしてくだせ～！！！　おねがいっす。おねがいしまっす！」（と叫ぶ）

――そこへ、狂言回りの流浪人の天気予報官がやってくる。

**天気予報官・天気見太郎**「ぼくは由緒正しき天気予報官です。国際天気庁の事務次官まで務めた大変優秀な天気予報官であり天気予報情報官でありました。

でも、去年、コロナ制約が解除され、それとともにわれらの仕事も解除解約されてしまったのです。

もう、この先、天気予報の仕事がない、と判断されたのです。嗚呼～、かなちいなあ～。かくして、国際天気庁は解体。各国天気予報官は、みんな、てんでバラバラ。各地に散っていきました。そこで、どうしているか、もはや消息不明でござります。」

**「悲の岬」**（を朗詠）

月光は黄泉路を越えてきた。満月を串刺しにしたまま血を舐めている処刑台の山猫は何に向かって吼えているのか。月夜に還ってゆく何処の島がある？　故郷への道は塞がれたまま魂の難民は国境線で不安と恐怖の夜に怯える。全世界を覆う電脳もこの怖れの暗渠をほぐすことはできない。絶対零度の深海闇夜。癒しなどどこにもないのだ。救いがあるとすれば無力に震える独りの夜を無為に過ごすのを見届ける自己があることのみ。深遠を呼び覚ますモノが存在するとしたら黄泉路を越えて自己を突き通す無限遠点のまなざしと意思を植えつけたこと。超越の波動が悲の受精卵を苦の岬から突き落とす。満月に向かって悲しく聳え立つ母之理主（モノリス）よ、応答せよ、応答せよ、応答せよ！

**「探すために生きてきた」**（狂言回しの天気予報官を中心におのごろ島村人3人とともに歌う）

探すために生きてきた　道を求めて生きてきた

夢を求めて生きてきた　愛を求めて生きてきた

１２３４５６７８９１０　果てしない　１２３４５６７８９１０　切りがない

１２３４５６７８９１０　とめどない　１２３４５６７８９１０　道がない

探すために生きてきた　探し求めて生きてきた

時を求めて生きてきた　闇を潜って生きてきた

１２３４５６７８９１０　果てしない　１２３４５６７８９１０　切りがない

１２３４５６７８９１０　とめどない　１２３４５６７８９１０　終わらない

探すために生きてきた　探し求めて生きてきた

路を求めて生きてきた　夢を求めて生きてきた

１２３４５６７８９１０　果てしない　１２３４５６７８９１０　ときがない

１２３４５６７８９１０　あてがない　１２３４５６７８９１０　みちがない

探すために生きてきた　探し求めて生きてきた

夢を求めて生きてきた　道を潜って生きてきた

愛を求めて生きてきた・・・

天気予報官「今日は朝から曇りのち晴れ。山間部ではときどき小雨も降るでしょう。時には、カミナリも鳴り響くでしょう・・・（と言っている間に、感極まったのか、しくしくと泣き始める）・・・みなさん、もう、そんな牧歌的な天気予報はできなくなってしまいました。みなさん、天気は死にました。みなさん、天気は死んだのです。わたしたちが、殺してしまったのです。」

**「みなさん、天気は死にました」**（天気予報官が朗詠）

「みなさん 天気は死にました」

と 高校三年生の田村君は 言った

その田村君は 生きているか？

五十年も昔のこと

荒れ狂う天地万物

林檎よ

縁は異なもの味なもの

そのとおりだが

でもね

死んだ天気も 縁次第

そのようになって そのようにある

あるべくして ある　なるべくして なる

世界はそのようにうごいている　縁はそのようにはたらいている

１ミリ１センチたりとて恣意的ではない

成るべくして成る　在るべくして在る

ありをりはべりいまそかり　青森カルシウムはどこ行った？

臼田甚五郎は飛びのいた　大森から青森まで

その飛躍こそが猿楽芸能　天狗舞　マイトレーヤ

そは如是我聞　聴くべき耳を研いた　研磨研耳

いかつこなく　いかしまぐはひのごと

弘前に　花折れて立つ

やつかみみ　はしぬれど　ねもないど

落穂拾いの姉御を拾った　恐山にて

津軽三味線の　音律たかあま　ぐひのみこと

だがされど　されど木島　みやこじま

いつまで封せど　ねこばばの

影落ち延びて　地に臥せり

やつがれは　しとどぬれて

大河の一滴まで　のみほした

ぬれおちど　ぷちそいど　れおなるど　はれおから　ひとしずく

はれ ほれ　みれ をれ

行き場なし　溜り場なし　咲き場なし　馬場愛なし

そうだとしても

すべてをいれて　すべてをすてて

本日早々

みなさん　天気は　死にました

みなさん　天気は　死にました

みなさん、天気は、死にました～！！！（全員で）

第一幕　イザナミ・イザナギの子探し

子どもがどこに行ったのか？　何をしているのか？　わからない。子どもの行方を捜す。

**天気見太郎**「（最初だけ、祝詞調で）掛まくも畏きイザナギ・イザナミの大神たち。あなたたちはいづこにいますや。この死に給うお天気様をどう見そなわしますや。日の本の生みの親たるイザナギ・イザナミの大神たち。あなた様のお声が聴きとうございます。」

**イザナミ**「（横目で、奇妙な姿の天気見太郎をチラと見ながら、目の前にいるかつての夫に向かって）イザナギよ、久しぶりじゃ。相変わらずの〈あなにやし、えをとこ！〉じゃのう。いい男じゃ。しかし、おぬしとふたたび会うのは、萬代（よろづよ）を経てのことじゃ。気の遠くなるようなむかしむかし、われらも夫婦（めおと）じゃった。けなげで、いとおしい、日の本最初の夫婦（めおと）じゃった。われがはじめにおぬしに声をかけたのために〈ひるこ・あはしま〉ができて、この数に入れずとなってしまったが、その〈ひるこ〉も〈あはしま〉もだいじな大事なわれらの子じゃった。そのことを、しっかりと、天つ神々に伝えることができないほど、われも幼くもの知らずであった。今となっては、そのことは、間違いであったとは思ってはおらぬ。間違いでもなんでもなく、むすひの自然（じねん）のままのことじゃった。だから、そのまま受け入れればよかったのじゃ。われも未熟じゃったのう。だが、おぬしもじゃ。イザナギよ！」

**イザナギ**「イザナミよ、まことに久しぶりじゃ。元気そうで何よりじゃ。昔のことを変えることはできぬが、われも幼なかった。おまえの死を受け入れられなかったのじゃ。許してくれ。おまえは今も〈あなにやし、えをとめ〉じゃ。＜あなにやし、え、をとめ＞ぞ。そのことをずっと詫びとともにおまえに言いたかったのじゃが、手立てがなかった。すまぬ。すまなかった。われの未熟ゆえ、おまえにおおきな〈辱（はぢ）〉と悲しみと怒りを与えてしまった。われの愚かさであり、未熟さであり、至らなさであった。こころからおわびする。今となっては、遅いかもしれぬが・・・」

**イザナミ**「そうじゃ。遅すぎたぞ、イザナギよ。時が経ちすぎたぞ。その間に、われらの生みし子どもたちがどうなっているのか、見えぬままじゃ。イザナギよ、罪滅ぼしに、われとともに、われらの子供や孫や子孫が、どのようになっているか、どこで、何をしているのか、見に行こうぞ！」

**イザナギ**「おう！　よろこんで、お供するぞ。〈あなにやし、え、をとめ〉よ！　イザナミよ！」

**イザナミ**「イザナギよ、われらは新婚旅行なんぞ、とてもじゃないが、できる時代じゃなかったのう。神代（かむよ）の昔じゃもん。ともに、天の浮橋に立って、天つ神から授けられたアメノヌボコを塩コヲロコロヲに掻き混ぜて、おのずから成ったおのごろ島。そのおのごろ島に降り立って、みとのまぐはひをして、むすばれて、われが島々を出産し、続いて神々を出産し、こうして、次々と自然万物を産みなしたのじゃ。そして、火の神カグツチを産んで、ミホトを焼いて黄泉の国に身罷る時も、反吐から金山彦・金山姫などの金属神を、ウンチから埴安彦・埴安姫などの粘土神を、おしっこからミヅハノメなどの水神を産みなしたのじゃ。思えば、次から次へ、よう出産したものじゃ。吾ながらようやったと、褒めてやりたいわ。」

**イザナギ**「おう！　ようやったぞ。おまえは。この青人草のニンゲンたちも、元はと言えば、おまえが生み成したものぞ。すごいぞ、イザナミ。ようやった。ようやった。イザナミよ、大妣（おほはは）よ。」

**イザナミ**「今さら、そう言われてものう。うしくないこともないが、片腹痛いのう。それは、その生み成したわが子の末裔がどうなっているか、わからないからじゃ。」

**イザナギ**「この日の本は、どうやら、縄文時代から、弥生時代、古墳時代、律令時代、奈良時代、平安時代、鎌倉時代、室町時代、戦国時代、江戸時代、明治時代、大正時代、昭和時代、平成時代、そして、令和時代の本年、令和六年となりにけり。よろず年が経ってしもうた。そんな時代のみぎひだり、来し方行く末がどうなっているであろうのう。」

**イザナミ**「いやいやいやいや、見るまいか、見るまいか。疾く疾く早う見てみるとするか、イザナギよ。吾らが子孫の行く末を！」

こうして、この世巡り、冥界・異界めぐりに出かけてゆくイザナミとイザナギ。

第二幕　少年少女探偵団の親探し

**天気見太郎**「こうして、日の本の元ちちははであるイザナギ・イザナミの大神様たちは、時空を超えて現代の少年少女のもとにまっしぐら。」

（イザナギ・イザナミはこの世と黄泉の境の黄泉つ平坂まで来て、かつてイザナギが道を塞いだ千引の大石のところまできて、少年少女たちの会話を覗き見る）

**ルリア**「暗い。暗い。暗い。物がよく見えない。みんな、だいじょうぶか？　近くに集まってくれ。ぼくたちのこの世界は、もう、終わりかもしれない。あたしは、女として産まれたという。もちろん、このわたしを産んだ母もいる。父もいる。北千束のハイソな家でな。

　でも、ぼくは、そんなちちははが、どうしても、どうしてもほんとうの、ほんとうのははちちとは思えなかった。そして、ほんとうの、ほんとうのははちちがどこかにいると、思いつづけてきた。この暗い世の中で生きていくために、ぼくたちは、ほんとうの、ほんとうのははちちを捜しに行こう！」

**ジョバンニ**「おとうさんは帰ってこなかったし、おかあさんは死んじゃったけど、ぼくはカンパネルラの星を探しに、もう一回、銀河鉄道に乗るつもりだよ、瑠璃亜（ルリア）。ほんとうのほんとうの、まことのまことのしあわせと父母を探して。瑠璃亜も都留女も鯉太郎も、一緒に往こう！」

（ルリアとジョバンニが中心となって歌う）

**「銀河鉄道の夜」**

この地球から見ると　銀河は白い乳の流れに見えて　夜空を彩る
その夜　ケンタウルスの祭りで　ぼくは　不思議な夢を見た
銀河の夜汽車に乗って　星の世界を旅する夢　だった

あの空の果てまで　ぼくたち二人で
まことのさいわいを　探しに行こう

カンパネルラの星まで　ぼくは旅をする
カンパネルラの星から　ぼくは飛んでゆく

この宇宙の中で　地球はいのちと苦悩に満ちた星として輝く
その夜　銀河の渦の中でぼくは孤独な星となる
いっしょに行こうと誓ったきみはどこにいるのか教えて　教えて

あの空の果てまで　ぼくたち二人で
まことのさいわいを探しにゆこう

カンパネルラの星までぼくは旅をする
カンパネルラの星から独りで飛んでゆく

あの空の果てまで　ぼくたちみんなで
まことのさいわいを探しにゆこう　探しにゆこう　探しにゆこう

**都留女**（とどめ、少女）「いい歌だね、ジョバンニ！　君らしいや。でもね、〈まことのさいわい〉なんて、幻想だよ。そんな夢を追いかけてもむなしく崩れるだけ。それは、ニンゲンの歴史が物語ってるだろ？　ぼくたちは、救い難く、度し難い生命種なんだよ。それにさあ、まあ、実の父母にもこんなものか、と思うし、幻想を持たないよ。本当の本当の父母なんていないよ。それ、なに？　って、思わないのかなあ。いい加減、目を覚ましなよ。ぼくたちの現在と未来は、汚穢と絶滅にまみれてるのさ。」

**鯉太郎**「ったく、救い難く、度し難いのは、都留女、おまえじゃないか。おまえも昔は夢見る少女だったのに。いつからそんな、すれっからしになったのだい？　どこにも、夢も希望もないこの世の中がおまえをそんなふうに変えてしまったのかなあ。」

都留女「何、いつまでも、甘いことばっか、言ってるんだよ。だから、鯉太郎は現実を見ない夢見る男、ドリーマーの恋多郎と言われるのさ。20歳にもなって、いい加減、目を覚ましなよ。もう、夢見る未来なんて、ありゃしねえよ。ただただ、崩れてゆくだけ、滅びてゆくだけ、死んでゆくだけだよ。だったらさあ、つかのま、今だけでも面白いことして死んでいこうよ。ほんとうの、ほんとうの父母なんて、無駄な探訪はきっぱり止めてさ。」

**鯉太郎**「都留女、絶滅していくから、その覚悟があるから、最後まで夢見るという生き方だってあるんだぜ。」

ジョバンニ「そうだよ。都留女、瑠璃亜、ぼくたちは、やっぱり、最後の最期に、ぼくたちの夢と希望を遺そうよ。未来に。」

**Qeer**（異星人・宇宙人意識を持つ性同一性障害の少年・少女「ニンゲンて、ほんと、面倒くさい奇妙な生き物だな。絶望するし、希望するし、夢見るし。ぼくは、未来の波留星からやってきた宇宙人だけど、みんなの探検に手を貸すよ。ぼくたちは、どこにも行けるし、何でもできるんだよ。ほんとうは。何もできないとか、どこにも行けないと思っているのは、自分の意識だけなんだ。ほんとうは、どらえもんの持っているどこでもドアのように、どこでも行けるんだ。さあ、つべこべ言わずに早く出発しよう！」

**ジョバンニ**「クイア、ありがとう。みんな、一緒に行こう！　手を組んで、円陣を作って。さあ、出発だ。Go！」

**全員で**「Go！　合！　業！」

**「堕天使ロック」　作詞・作曲　つげ春乱（早川義夫）**

**見つめる前に跳んでみようじゃないか**

**俺たちにできないこともできるさ**

**さあみんなでロカビリーを踊ろう**

**心は変わりやすいけれど**

**本当はなにもかわっちゃないのさ**

**まわりだけがぐるぐるまわるのさ**

**子供の頃は良かったじゃないか**

**裸でも生きていられたぜ**

**さあみんなでツイストを踊ろう**

**ないものねだりだけども**

**俺たちの地平線まで**

**さあみんなでゆこうぜ出発だ**

**ころがってゆけくずれてゆけ**

**堕ちるとこまで墜ちてゆけ**

**咲いた花がひとつになればよい**

**見つめる前に跳んでみようじゃないか**

**俺たちにできないこともできるさ**

**さあみんなでブルースを踊ろう**

第三幕　異界遍歴　イザナミ・イザナギと少年少女探偵団がともに訪なう

天気見太郎「こうして、現代の少年少女たちは、ほんとうの、ほんとうのちちははを探す旅に出たのでした。そして、神代（かみよ）のイザナギ・イザナミの大神様たちも、現今の子どもたちを見届ける時空遍歴の旅に出たのでございました。そして、その結果は・・・如何に？　如何に？　如何なるや？」

1. ニーチェ

ニーチェ「ツァラトゥストラよ、今日も朝日に目覚めた。わが大きな理性たる身体は明晰に目覚めておるぞ。ツァラトゥストラよ。今朝はしかし、奇妙な風が、西からも、東からも吹いている。かつて、地球の橋の極東の日本では、東からの風を東風（こち）と呼んだそうだが、東風（こち）吹かば匂ひおこせよ梅の花　あるじなしとて春を忘るな、と大宰府に左遷された、悲嘆にくれた大宰府権帥（だざいふごんのそち）の菅原道真は歌を詠んだと云う。風流じゃのう、日本人は。超人を説いた吾は違うぞ。ツァラトゥストラよ。そんなルサンチマンと哀憐に満ちた歌なぞではなく、もっと明晰な大きな理性の遊戯を見せてくれようぞ。」

（とそこへ、東風に乗って突然少年少女探偵団の面々が現れ、少年少女たちが口々に）

少年少女たち「ここはどこだ？　ここは、どこだ？　ココハ、ドコダ？」（と、探り合う）

ニーチェ「迷妄の中にいるようじゃな、異国の少年少女たちよ。」（以下、未完成）

1. 空海
2. 番場の忠太郎
3. おつる（阿波人形浄瑠璃「傾城阿波鳴門」）
4. マッチ売りの少女、こと、実はもっきり屋の少女コバヤシチヨジ
5. デロリンマン
6. シモーヌ・ヴェイユ
7. ヤマトタケル
8. 宮沢賢治

終幕

悪売「終わったのう。ついに、終わってしまったのう。」

良夫「アクメよ、しかし、これで終わりではないぞ。次の世があるぞよ。」

流太「ヨシオよ、だがのう、次の世も同じではないかのう。果てしない、終わりないニンゲンという種族の宿業じゃよ」

良太「それでも、希望を託すぞ、おれは。希望を捨てたかないんじゃ。あきらめとうないんじゃ。おれたちがあきらめたら、ほんとうにおしまいじゃけん。」

悪売・流太「ヨシオよ、おまえは、ほんま、ノー天気じゃ。お天気様も呆れとるわ。ほなけんど。おまえんようなやつがひとりくらいおらんとのう。ほんま、世も末じゃけん。ヨシオよ、がんばってつかあさい。まかせたぞ。」

良夫「おう！」

みなさん天気は死にました Ⅱ　（おのごろ村の3人で朗詠）

みなさん天気は死にました

こころの準備はいいですか？

からだの準備もできてます？

たましいの準備はいかがです？

みなさん天気は死にました

でも、死んだとはいえ天気はありまする

狂天慟地の天気ではありますが

前人未到把握不能のお天気ですが

みなさん天気は死にました

どうして天気は死んだのか？

だれもほんとうの答えはわかりません

でもだれもがうすうすわかっています

みなさん天気は死にました

曇りのち晴れとか晴れのち雨とか

天気予報官も上がったり

天気に振り回されることもなく

みなさん天気は死にました

むかしむかしそのむかし

秦の始皇帝の時代に天気予報官が現われて

皇帝様に天の気を伝えました

よしよしおまえは愛い奴じゃ

天気の一つも飼ってみろ

俺の意思を天に伝えて天命としろ

そこから天気への脅迫が始まりました

みなさん天気は死にました

秦の始皇帝ばかりではありません

あらゆる時代のあらゆる為政者は

天気のこころを気にはしながら天気を憎みました

思い通りにならないもの すごろくの賽 賀茂川の水 僧兵

いや一番思い通りにならないものは 天気のこころでございます

みなさん天気は死にました

天気のこころをだれもがわからず

天気のこころにだれもが通ぜず

天気はしだいにくるって孤独死してしまったのでありました

みなさん天気は死にました

誰にも何処にもまんべんに

いろいろ気配り天配り

配りすぎて疲れ果て

どうするすべもないままに

みなさん天気は死にました

みなさん天気は死にました

葬儀を行う人はいませんか？

どんな葬式必要ですか？

いのりいのりいのりです

みなさん天気は死にました

みなさん天気は死にました

ナポレオンもヒトラーも豊臣秀吉も侵略できなかったもの

それが天気だったのに

どうしたことか　あろうことか

みなさん天気は死にました

悲しみに満ちた追悼メッセージ

不安にあふれた警告メッセージ

怖ろしいばかりの脅迫メッセージ

そのどれもがどうすることもできない不可能性のトーン

みなさん天気は死にました

天気予報がなつかしい

ああ天気よ天気帰って来ておくれ

みなさん天気は死にました

曇りも晴れも雨も雪も台風もない

みなさん天気は死にました

ぼくらもともに死にましょう

ぼくらもすべなく死にましょか

みなさん天気は死にました

でも 死んでも終わりではありません

死んで花実が咲くものか　と言いますが

死んで花実も咲きまする

みなさん天気は死にました

でも 死んだあとは　よみがえるだけ

あとは　野と成り　山と成る

みなさん天気は生まれます

みなさん天気は阿礼まする

みなさん天気に生まれませ

**「悲の岬 Ⅱ」**（天気予報官が朗読する）

深い夜の瞳の底でアンテナは疼いた。音信絶対不能の音源を逆探知したが事切れてしまった悲劇的な預言者を弔う。耳孔の奥でトマトが潰れマグネシウムの閃光が散らばった。神父は手旗信号を使って必死の面持ちで十字を切ったが誰も気にせず通り過ぎた。夜空を染める無関心と迸る涙のような流星。帰って来い。暗号解読が遅れたため避雷針が裂けて粉々に砕けた。もう一歩も先に進めない。三歩退いて倒立したまま巫女は緋袴を翻して昏睡した。懐かしさこそ誘惑の手口なのに。忘れるな。未来を覗く窓が指揮棒で激しく割られていた。空に向かって牛乳を撒き散らした。ハレルヤを叫びながら白色驟雨に撃たれ南十字星に内臓を鷲摑みされたまま遠くの遠くまで嘆きの河を渡って往く。その日始祖鳥は翔ぶ空を切なく探した。

「メコン」

メコン

棚の上の骨壺を抱いて　夕焼けの散華の海に入る

人知れず葬りの蛾　矢板の上に意気消沈した雪だるまが　悶えた

この世の果てまで飛んで来たよ　誰にも見られず　何人にも咎められず

靴下を履いたまま飛び込んだ　おまえの胸に

メコンよ

防ぎようもない空と　喘ぎ見るばかりの　おまえの喉元

ぬめりと流れてゆく舌先を　衝立は途絶えた

メコンよ

何というなつかしさの奥に

蜜蜂がつつき合って　互いを刺し殺す現場を

生まれたばかりの　二日月の生卵　割れぬまま吞み込んだ　おまえの度量

いくばかり　いかばかりかと　捨て石に訊く　死後の生存を

名ばかりの孤独に　唯名論者は躓く

明日を信じないくせに　明日を待ち望む偽善者よ

サンクトペテルブルグまで　日傘をさして

揺籃の扉　消え果てし秀妻　海鮮問屋の蛸と消ゆ　うつばりの夜汽車で

さあ ひらいて　おまえのまたを

ちのはてまでつづく　あめのやちまた

だが ちまたには　季節外れの雪が　降っていた

熱帯夜のメコンの夜なのに

恐れ多くも畏くも　狂天慟地の凧上がる

だがたとえ 天地がひっくり返っても

あめつちをつなぐ母なる河として

あなたは 流れつづける

この世の果てまで

地の涯てまでも

この世の果てまで　地の涯てまでも

この世の果てまで　地の涯てまでも

「いのちのうた」（全員で静かに合唱。次第に盛り上がっていく）

死にゆくもの　生まれいづるもの

ともに刻む　いのちのうた

生まれいづるもの　死にゆくもの

ともに歌う　いのちのうた

振りかえっても　届かない

仰ぎ見ても　見わたせない

思い出す　ふるさと

もとはじめの声が　ひびく

やさしさ　うつくしさ　いのりのふかさ

気づかなかったよ　大妣よ

あなたのいのりと　ねがい

やさしさ　うつくしさ　ねがいのふかさ

気づかなかったよ　大妣よ

あなたのいのりとねがい

いのり　ねがい　いのちの深さ

いのり　ねがい　いのちの遠さ

いのり　ねがい　いのちのうた